

中臣遺跡発掘調査概報

昭和58年度

京都文化観光局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

狩猟と採集に明け暮れた原始の時代以来、我が京都市域には、居住に適した平野部及び緩斜面が、約250平方キロメートルも所在し、その範囲に祖先の営為を示す遺跡が、平安京跡をはじめ約830箇所も含まれています。1平方キロメートル当たり3箇所強の遺跡が分布することになり、全国平均の2箇所強を上まわっております。したがって、宅地造成等の中規模以上の開発があれば、遺跡に遭遇する可能性が高くなります。

本市では、このような状況の中で、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、保存し難い遺跡については調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めております。

この概報は、昭和58年度国庫補助事業として実施した調査の結果をまとめたものであります。おわりに調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導、御協力をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和59年3月

京都市文化観光局

例　　言

- 1 本書は、昭和58年度文化庁国庫補助事業における中臣遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は3箇所実施した。調査次数は55次・56次・57次調査である。
- 4 図中に使用した方位は、平面直角座標系VIによる。
- 5 標高は、海拔高 T. P.を使用した。
- 6 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行都市計画基本図(2500分の1)・勧修寺を修正して使用した。
- 7 本文中の写真は、遺構・遺物とも牛島 茂が撮影した。
- 8 本書の執筆・編集は、平方幸雄・辻 裕司が担当した。

本 文 目 次

I	55次調査	1
1	調査経過	1
2	遺構	1
3	遺物	3
4	小結	3
II	56次調査	4
1	調査経過	4
2	遺構	4
3	遺物	10
4	小結	13

III	57次調査	14
1	調査経過	14
2	遺構・遺物	14
3	小結	18
IV	まとめ	19

図版目次

- 図版一 遺跡 調査位置図
- 図版二 遺跡 55次調査区周辺主要遺構位置図
- 図版三 遺跡 56・57次調査区周辺主要遺構位置図
- 図版四 遺跡 56次堅穴住居址実測図
- 図版五 遺跡 56次堅穴住居址実測図
- 図版六 遺跡 56次堅穴住居址実測図
- 図版七 遺跡 56次堅穴住居址実測図
- 図版八 遺跡 航空写真
- 図版九 遺跡 1 55次全景
2 1号住居址全景
- 図版十 遺跡 56次全景
- 図版十一 遺跡 1 1号住居址全景
2 2号住居址全景
- 図版十二 遺跡 1 3号住居址全景
2 同遺物出土状況
3 同
- 図版十三 遺跡 1 4号住居址全景
2 同土堤状高まり

- 図版古 遺跡 1 8号住居址全景
 2 9号住居址全景
- 図版玄 遺跡 1 11号住居址全景
 2 13号住居址全景
- 図版宍 遺跡 1 12号住居址全景
 2 同貯藏穴、粘土塊出土状況
 3 同遺物出土状況
- 図版右 遺跡 1 15号住居址全景
 2 同遺物出土状況
 3 同細部状況
- 図版大 遺跡 57次全景
- 図版丸 遺跡 1 1号住居址全景
 2 同遺物出土状況
- 図版平 遺跡 1 2号住居址全景
 2 同カマド
- 図版二 遺物 56次調査出土土器
- 図版三 遺物 56次調査出土土器
- 図版四 遺物 55次調査・56次調査出土土器

挿図目次

図1 調査区平面図.....	1
図2 1号住居址.....	2
図3 1号住居址・SD 1出土土器	3
図4 6・20・56次調査区平面図	5
図5 3号・9号・12号・13号住居址出土土器.....	11
図6 2号・8号・11号・17号住居址出土土器.....	13
図7 調査区平面図.....	14
図8 1号住居址.....	15
図9 2・3号住居址.....	16
図10 2・3号住居址カマド	17

I 55 次 調 査

1 調査経過

調査地点は、山科区勤修寺西金ヶ崎75番地に所在する。当該地が住宅建設地として埋め立てられることに伴い、事前に発掘調査を実施した。

調査地点は栗栖野丘陵から南西に広がる低位段丘部の末端に位置し、旧安祥寺川とは10mほど隔てた地点にある。

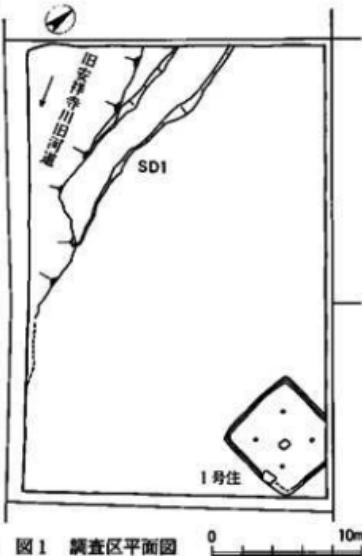
当該地周辺におけるこれまでの発掘調査は、市街化道路及び宅地などに対し昭和48年度以降2次・3次・7次・8次・35次・52次調査など(図版二)が実施されている。その結果、当該地から北側周辺部では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址・土壙等、古墳時代後期以後の竪穴住居址・掘立柱建物跡・溝等を多数検出しているが、東側周辺部では明確な遺構は検出していない。今回の調査はこのような調査結果と当該地が旧安祥寺川に南接しているという地形的な位置などからみて、周辺一帯に展開する集落の南限を確定する作業を進める上で重要な意味があった。

調査対象地の面積は約670m²あり、ほぼ対象地全域にわたって調査を実施した。調査区の基本層序は耕土・床土が65～75cmあり、調査区の中央付近から北・東側ではその直下が地山(黄褐色泥土)である。南・西側では床土下に暗茶褐色泥土層が20～30cmあり、南西に向かって漸次厚く堆積する。なお、この層から縄文土器・弥生土器(後期)が出土した。

2 遺構

遺構は暗茶褐色泥土及び地山面で検出した。主な遺構には竪穴住居址1戸、溝・河川各1条がある。その他、土壙及びピットを検出した。

1号住居址 調査区の東隅で検出した。住居址の北東隅は調査区外にあり、その部分については未調査である。平面形は方形を呈し、検出面での規模は東西6.17m、南北5.89m、床面までの深さ6～10cmある。壁溝と床面の間に地山削り出しによる土堤状高まりがあり、



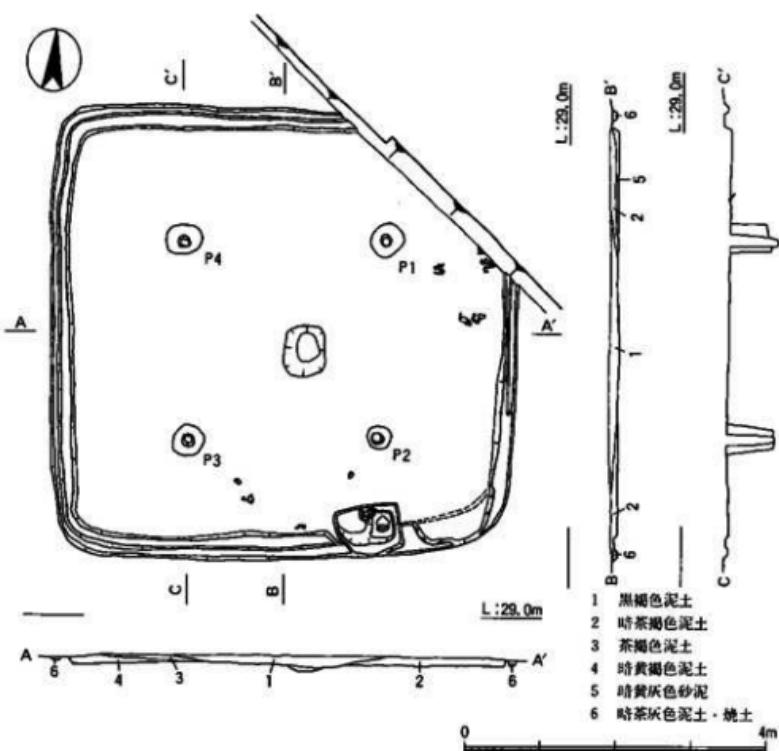


図2 1号住居址

調査部分では全周する。上幅5~14cm、検出面からの深さ1~2cm、床面からの高さ6~10cmある。壁溝はほぼ全周するが、東南角付近で一部途切れる。上幅10~15cm、検出面からの深さ4~7cm。なお、溝底の水準は床面とほぼ同じ高さか、もしくは2~4cm床面より高い。主柱穴は4箇所あり、各柱穴は径16cmの柱当りを有し、床面からの深さ57~67cmある。柱間隔はP1から右回りで2.60・2.52・2.57・2.66mある。床面中央からやや東南に偏った位置にピットが1箇所ある。平面形は角丸方形を呈し、長軸70cm、短軸56cm、床面からの深さ10cmある。南壁の中央から東に偏った位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は不整形で3段落ちを呈し、上縁で長軸85cm、短軸54cm、床面からの深さ14cmある。なお、床面で炭化材を部分的に検出した。遺物は床面及び貯蔵穴から壺(図3-1・2)・壺などが出土した。

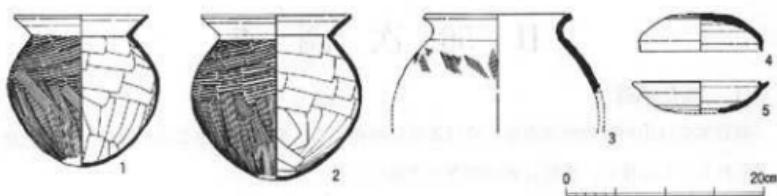


図3 1号住居址・SD 1出土土器

SD 1 調査区の西寄りで検出した南北方向の溝で、2次・3次調査の際検出した溝の延長部である(図版二)。なお、溝の南側延長部分は河川により削り取られている。断面形はU字形を呈し、溝底は南に向かって下がっている(高低差約15cm)。検出面で幅2.1~3.5m、深さ25~30cmある。遺物は土師器壺、須恵器杯(図3 3~5)などが出土した。

河川 調査区の西南で検出した旧安祥寺川の旧河道である。検出面からの深さ約2.1mある。遺物は江戸時代後期の染付(伊万里)などが出土した。なお、現在の旧安祥寺川西肩口とは11~21m隔たっており、底の水準は現在の方が30~40cm程低い。

3 遺物

遺物は各遺構及び暗茶褐色泥土層から繩文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器などが遺物整理箱で3箱出土した。このうち、1号住居址及びSD 1から出土した主な土器を図示した。

土師器壺(1~3) 古墳時代前期の(1・2)と同後期の(3)がある。1・2は口縁部がくの字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。外面は頸部以下にタタキメを施し、最大径以下をハケメ調整する。内面は頸部以下、最大径付近までを横方向で、以下を縱方向でヘラケズリする。口径13.5・15.0cm、器高15.4・16.7cm。3はやや内傾気味に立ち上がる頸部と外反する口縁部からなり、外面をハケメ調整する。口径14.6cm。

須恵器杯(4・5) 蓋の(4)と身の(5)がある。4は天井部付近を、5は底部付近を幅狭くヘラケズリする。口径12.4・11.9cm、器高3.8・3.2cm。

4 小結

検出した遺構の時期は出土した遺物などからみて、1号住居址が4世紀前半、SD 1が6~7世紀、河川は江戸時代後期である。

1号住居址は当調査地点周辺に弥生時代後期~古墳時代前期に形成された堅穴住居群(集落)のもっとも南辺に位置しており、集落の範囲確定作業を進める上で重要な成果を得た。

II 56 次 調 査

1 調査経過

調査地点は山科区勧修寺西金ヶ崎11番地に所在する。当該地が住宅建設地として埋め立てられることに伴い、事前に発掘調査を実施した。

調査地点は栗栖野丘陵南端から南へ約100m、旧安祥寺川とは約80m離てた低位段丘部に位置する。

当該地周辺は昭和150年以降6次・10次・20次調査など(図版三)が実施されている。当該地に北・南接する6次・20次調査地点では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址を密集した状態で検出しており、また両次調査区から当調査区にまたがる竪穴住居址もあり、当該地には多数の竪穴住居址が密集した状態で存在していると予測できた。

調査対象地の面積は約1000m²あり、ほぼ対象地全域を調査した。調査区の基本層序は現耕土・床土が約20cm、旧耕土・床土が約20cmあり、その直下が地山(茶褐色泥土・黄灰色泥土・灰褐色砂礫)である。遺物包含層は水田耕作等により削平されたと考えられ、検出していない。また、造構上面も同様に削平を受けたと考えられる。

2 造構

造構は調査区東隅付近を除いた全面にあり、地山面で検出した。主な造構は竪穴住居址19戸、溝1条、土壙2基などがである。その他、ピット・土壙状落ち込みを検出した。

1号住居址(図版四・二一) 住居址群の最東南隅付近で検出した。3号住居址の東半部と重複しており、3号住居址床面より10~18cm高く床を貼って構築している。平面形は北角が他の角より外側に張り出した歪な方形を呈する。検出面で長軸5.54m、短軸5.42mあり、床面までの深さ15~20cmある。壁溝はほぼ全周し、上幅13~20cm、床面からの深さ5~8cmある。主柱穴は4箇所あり、P1~P3は径13~20cmの柱当りを有する。各柱穴は床面からの深さ32~47cmある。柱間隔はP1から右回りで2.52・2.56・3.06・2.70mある。遺物は床用入土などから壺・小型丸底壺などの小片が出土した。

2号住居址(図版五・二二) 調査区中央のやや北側で検出し、床面ぎりぎりまで耕作等による削平を受けていた(検出面=床面)。平面形は方形を呈し、長軸4.54m、短軸4.42mある。壁溝は全周し、上幅12~14cm、床面からの深さ4~9cmある。主柱穴は4箇所あり、各柱穴は径13~17cmの柱当りを有し、床面からの深さ12~22cmある。柱間隔はP1から右回りで2.38・2.26・2.31・2.30mある。北東角の壁体部に接して貯蔵穴が1箇所あ

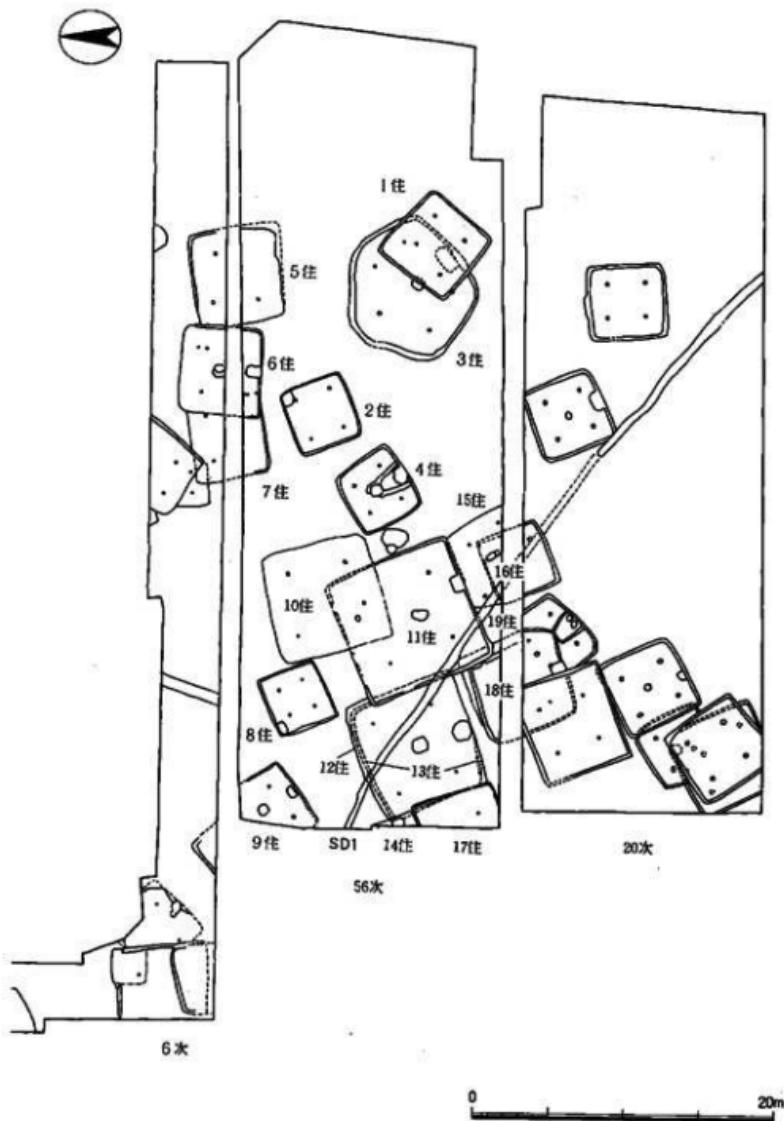


図4 6・20・56次調査区平面図

る。平面形は不整方形を呈し、長軸94cm、短軸83cm、床面からの深さ32cmある。遺物は貯蔵穴から小型丸底壺(図6・33)が出土した。

3号住居址(図版 六・主) 1号住居址と重複した位置で検出した。1号住居址により東南の壁体部が掘り下げられている。平面形は五角形を呈する。検出面で北東—南西間8.74m、北西—南東間8.62mあり、床面までの深さ35~50cmある。壁溝は全周し、上幅18~40cm、床面からの深さ6~10cmある。主柱穴は5箇所ある。P2は径16cmの柱当りを有し、床面からの深さ36cmある。P1・P3~P5は径18~20cmの柱当りで、深さ48~55cmある。柱間隔はP1から右回りで3.12・3.06・3.87・2.98・3.45mある。床面中央から東に偏った位置にピットが1箇所ある。平面形は丸味を帯びた方形を呈し、床面で長軸84cm、短軸74cm、深さ14cmある。なお、ピット内で底部に密着した状態で30cm大の石を検出した。南東壁の中央からやや南西に偏った位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は北東—南西に長い長方形を呈し、長軸172cm、短軸95cm、床面からの深さ27cmある。なお、炭化材及び炭が床面にあり、焼失住居である。遺物は床面及び貯蔵穴などから壺・甕・鉢・器台(図5・1・2・5~7・18・26)・高杯・鉄製品などが出土した。

4号住居址(図版 七・主) 調査区の中央、2号住居址の南西で検出した。平面形は方形を呈し、検出面で長軸4.84m、短軸4.60m、床面までの深さ7~22cmある。壁溝は全周し、上幅12~22cm、床面からの深さ5~9cmある。主柱穴は4箇所ある。各柱穴は径15~20cmの柱当りを有し、床面からの深さ20~48cmある。柱間隔はP1から右回りで2.66・2.25・2.12・2.20mある。床面中央にピットが1箇所ある。平面形は不整梢円形を呈し、長径85cm、短径74cm、床面からの深さ20cmある。南東壁の中央で壁体部に接した位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は不整方形で2段落ちを呈し、上縁で長軸110cm、短軸82cm、床面からの深さ35cmある。中央ピットと貯蔵穴を取り囲むような状態で土堤状高まりを検出した。この土堤状高まりは床面に黄褐色砂泥を盛り上げてつき固め、断面形は台形を呈する。床面で幅30~35cm、高さ6~9cmある。なお、中央ピットの北西側で一部途切れる。遺物は床面などから壺・高杯などが少量出土した。

5号住居址 3号住居址の北側で検出した。北接する道路部分の調査で検出した竪穴住居址(6次調査:15号住居址)の南半部にある。なお、今回調査したのは床面全体が削平され、住居掘込部分(床用入土部分)である。これまでの調査結果を総合すると、平面形は方形を呈し、復元長は長軸約6.2m、短軸約6.0mある。壁溝は6次調査部分では検出しているが、今回の調査部分では削平されていた。主柱穴は3箇所検出したが、本来4主柱か

らなり、南東側に位置する主柱穴は、道路側溝を取り付ける際の工事で削平され、未検出である。なお、6号住居址により北西角付近が削り取られている。炭化材、焼土等を6次調査部分で検出しており、焼失住居である。遺物は壺・高杯などが出土した。

6号住居址 5号・7号住居址と重複した位置で検出した。6次調査で検出した竪穴住居址（：14号住居址）の南半部にあたる。これまでの調査結果を総合すると、平面形は方形を呈し、長軸5.82m、短軸5.60mある。壁溝は南・東壁下にある。主柱穴は2箇所検出したが、本来4主柱からなり、南側の2主柱穴は未検出である。なお、床面は5号・7号住居址床面を10～15cmほど掘り下げて構築している。床面中央に2段落ちを呈するピットが1箇所あり、南壁中央部と接した位置に貯蔵穴が1箇所ある。遺物は床面及び貯蔵穴などから壺・壺・高杯などが出土した。

7号住居址 6号住居址と重複した位置で検出した。6次調査で検出した竪穴住居址（：17号住居址）の南半部にあたる。これまでの調査結果を総合すると、平面形は方形を呈し、長軸約5.3m、短軸5.12mある。壁溝は南壁下と南東・南西角付近で検出した。主柱穴は2箇所検出したが、本来4主柱からなり、南側の2主柱穴は未検出である。なお、6号住居址により東壁と床面の一部が削り取られている。遺物は床面から壺が出土した。

8号住居址(図版 六・古-1) 調査区の北西側で検出した。住居址の大部分は床面ぎりぎりまで耕作等による削平を受けていたが、部分的に住居址覆土が2～3cmの厚さで残存していた。平面形は方形を呈し、長軸4.28m、短軸4.10mある。壁溝は南東側の一部で途切れる他は全周し、上幅12～18cm、床面からの深さ5～12cmある。主柱穴は4箇所にあり、各柱穴は径13～20cmの柱当りを有し、床面からの深さ37～52cmある。柱間隔はP1から右回りで1.72・1.93・1.70・1.76mある。北西角と接した位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は方形を呈し、長軸75cm、短軸48cm、床面からの深さ17cmある。床面に炭化材があり、また床面中央部が熱により赤変(焼面)しており、焼失住居である。遺物は床面及び貯蔵穴などから壺・小型丸底壺(図6-34)などが出土した。

9号住居址(図版 古-2) 調査区の北西角で検出した。住居址の北西部は調査区外にあり、その部分については未調査である。平面形は調査部分の形状からみて方形を呈すると考えられる。壁溝は南東・北東壁下で検出し、主柱穴は2箇所検出した。床面のほぼ中央と考えられる箇所に円形を呈するピットが1箇所あり、南東壁の中央部付近に貯蔵穴が1箇所ある。遺物は床面、貯蔵穴などから壺・鉢(図5-8・16)が出土した。

10号住居址 8号住居址の東側に接する位置で検出した。住居址の南西部は11号住居址

と重複している。住居址の北半では床面は削平をまねがれていたが、南半の大部分は削平されていた。平面形は方形を呈し、長軸7.32m、短軸7.06mある。壁溝は検出せず本来有しなかったと考えられる。主柱穴は4箇所あり、柱間隔は北東側の主柱から右回りで3.81・3.90・4.0・4.05mある。なお、残存している床面は、11号住居址の床面から30cmほど上にある。遺物は主柱穴から壺の小片が出土した。

11号住居址(図版 五・玄一) 10号住居址の南西部と重複した位置で検出した。12・13・19号住居址の北東部の一部を掘り埋め、15号住居址によって南東壁の一部を削り取られている。平面形は方形を呈し、長軸8.84m、短軸8.76m、検出面から床面までの深さ17~28cmある。壁溝は北西壁の一部を除く整体下にあり、上幅16~24cm、床面からの深さ5~16cmある。なお、北西・北東・南西壁下に径6~17cm、床面からの深さ5~13cmの壁柱穴が22箇所ある。主柱穴は4箇所あり、各柱穴は径16~20cmの柱当りを有し、床面からの深さ48~58cmある。柱間隔はP1から右回りで4.54・4.46・4.43・4.73mある。床面の中央から南に偏った位置に地床炉が1箇所ある。平面形は橢円形で2段落ちを呈し、上縁で長径115cm、短径65cm、床面からの深さ12cmある。なお、覆土に焼土・炭を多量に含有し、底面などの一部が熱で赤変している。南東壁の中央からやや北東に偏った位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は方形で2段落ちを呈し、上縁で長軸106cm、短軸96cm、床面からの深さ26cmある。なお、床面に炭化材があり、また床面がかなり広い範囲にわたって赤変しており焼失住居である。遺物は床面及び貯蔵穴などから壺・甕・鉢・小型器台(図6 28~32)・瓶などが出土した。

12号住居址(図版 七・夫) 11号住居址の南西部と重複した位置で検出した。13号住居址を4~20cmほど埋めて、北及び東へ20~30cmほど拡張し、P1・P4を13号住居址の柱穴から北西に28cm、北東に16cm外側へ柱位置をずらして13号住居址を建て替えている。なお、11号住居址によって北東壁の一部を、14・17号住居址によって南西壁及び床面の一部が削り取られている。平面形は方形を呈し、長軸7.95m、短軸7.78m、検出面からの深さ13~28cmある。壁溝は検出せず、本来有しなかったと考えられる。主柱穴は4箇所あり、各柱穴は径14~18cmの柱当りを有し、床面からの深さ53~67cmある。柱間隔はP1から右回りで4.02・4.76・4.06・4.97mある。床面のほぼ中央に地床炉が1箇所ある。平面形は不整形形を呈し、長軸103cm、短軸92cm、床面からの深さ30cmある。なお、炉の南東壁にはほぼ密着した状態で40cm大の石を検出した。南東壁のほぼ中央に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は方形で2段落ちを呈し、上縁で長軸1.28m、短軸1.14m、床面からの深さ60cmある。

なお、貯蔵穴の北東部で約50cm大、厚さ23cm以上の粘土塊が床面に密着した状態で出土した。床面に炭化材があり、床面中央部付近が赤変しており焼失住居である。遺物は床面及び貯蔵穴などから壺・甕・鉢・高杯・手彫り形土器(図5 4・9・10・12~15・19~24・27)・磁石・粘土塊が出土した。

13号住居址(図版 四・左一2) 12号住居址の下部で検出した。12号住居址の建て替え前の竪穴住居址である。平面形は方形を呈し、長軸7.86m、短軸7.42mある。壁溝は南西壁の一部と南東壁の大部分を除き壁体下に巡る。上幅10~26cm、床面からの深さ2~10cmある。主柱穴は4箇所ある。P4は径17cmの柱当りを有し、各柱穴は床面からの深さ52~57cmある。柱間隔はP1から右回り(柱掘形の心々)で4.03・4.74・3.78・4.80mある。遺物は床面などから壺・甕・鉢(片口)・高杯(図5 3・11・17・25)・粘土塊が出土した。

14号住居址 13号住居址の北西部と重複した位置で検出した。12・13・17号住居の一部を掘り下げて構築する。なお、当竪穴住居址の大部分は調査区外にあり、南東角付近のみを調査した。検出部の形状からみて、平面形は方形を呈すると考えられる。遺物は覆土からのみ出土し、甕などがある。

15号住居址(図版 左) 11号住居址の南東部及び16号住居址と重複した位置で検出した。床面は16号住居址床面より5~10cm高い位置で貼り床する。なお、住居址南西部は南接する宅地(20次調査)に存在する筈であるが、20次調査では未検出である。平面形は方形を呈すると考えられ、北東一南北間で5.8mほどある。壁溝は検出せず、本来有しなかったと考えられる。主柱穴は3箇所あるが、本来4主柱からなり南東に位置する柱穴は未調査部分にある。床面中央と考えられる位置に地床炉が1箇所あり、覆土に焼土・炭を含有する。なお、住居廃絶後、ある程度埋没(7~15cm)した段階で多量の土器及び石(10~30cm大)を投棄している。住居に伴う遺物は地床炉などから壺・高杯などが出土した。

16号住居址 15号住居址の下部で検出した。20次調査で検出した竪穴住居址(:7号住居址)の北東部にあたる。これまでの調査結果を総合すると、平面形は方形を呈し、長軸4.56m(復元長)、短軸4.52mある。壁溝は北西壁下で一部途切れるが、全周するとみられる。主柱穴は2箇所検出したが、本来4主柱からなり北西及び南西に位置する柱穴は未調査である。遺物は床面、壁溝などから壺・甕などが出土した。

17号住居址 14号住居址の南東部で検出し、住居址の約3分の2は調査区外にある。当竪穴住居址は、12号住居址が埋没した後に南東側の一部を掘り下げて構築するが、調査時の誤認により、12号住居址を最初に調査し、北東壁及び同壁体下に巡る筈の壁溝を未

調査のまま掘り下げてしまった。当住居址の北東壁肩口は、12号住居址南西壁の肩口から北東へ0～50cmほど寄った位置に推定できる。

平面形は方形を呈するとみられ、北西一南東間で5.60mある。壁溝は調査部分で本来全周していた筈である。主柱穴は1箇所検出したが、4主柱からなると考えられる。遺物は床面、壁溝などから甕(図6-35・36)などが出土した。

18・19号住居址 11号住居址南西隅付近と重複した位置で検出した。18号住居址床面は19号住居址床面から4～10cm低い位置にある。18・19号住居址とも平面形は方形を呈する。両竪穴住居址は20次調査で検出した竪穴住居址(：10号住居址)北半部に相当する。なお、18号住居址南西壁は20次：10号住居址南西壁に、19号住居址北東壁は20次：10号住居址北東壁に相当する位置にあるが、18号住居址北東壁、19号住居址南西壁は20次調査では未検出である。20次：10号住居址床面の水準は概ね19号住居址床面の水準に相当する。遺物は18号住居址から甕・鉢・粘土塊などが、19号住居址から甕が出土した。

S D 1 調査区の南西側で検出した北西一南東方向の溝で、20次調査で検出した溝(：S D 3)の延長部である。溝の断面形はU字形で、溝底は南東に向って下がる(高低差12cm)。検出面で上幅30～55cm、深さ5～17cmある。遺物は土師器甕、須恵器甕などが出土した。

S K 1 11号住居址の東側で検出した土壤で、S K 2を掘り込む。平面形は不整梢円形を呈し、検出面で長径70cm、短径64cm、深さ20cmある。遺物は壺・甕などが出土した。

S K 2 S K 1と重複した位置で検出した土壤である。平面形は梢円形を呈し、検出面で長径174cm、短径127cm、深さ22cmある。遺物は壺・甕・甌・高杯・器台が出土した。

3 遺物

遺物は各遺構から弥生土器、土師器、須恵器、石鐵、鉄製品、砥石などが遺物整理箱で54箱出土した。このうち2号・3号・8号・9号・11号～13号・17号住居址から出土した主な土器(第V様式～布留式併行)を図示した。

壺(1～4・28・29) (1・2)は短かく直立する口縁部からなる。1・2ともにハケメ調整する。口径9.1・8.1cm、器高18.4・16.4cm。(3)は長く直立する頸部と角度を変えて外上方に開く口縁部からなる。外面及び口縁部内面は丁寧なヘラミガキを行なう。口径15.4cm。(4)は短かい頸部と角度を変えて直立する口縁部からなる。肩部以下の内面をハケメ調整する。口径11.3cm。(28・29)は頸部で強く屈曲し、外上方に開く口縁部からなる。28は頸部以下の外面をハケメ調整する。29は外面及び口縁部内面をヘラミガキする。なお、28は胎土の特徴からみて搬入品である。口径14.4・15.2cm。

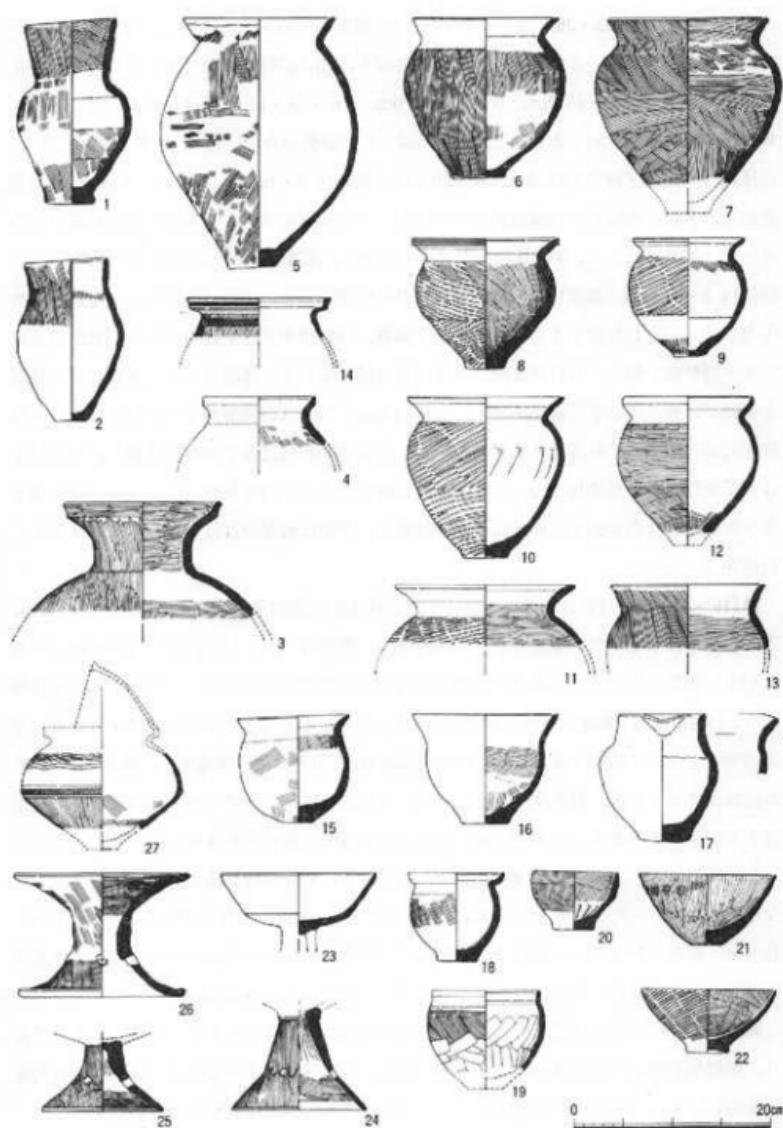


図5 3号・9号・12号・13号住居址出土土器

甕 (5~15・30・35・36) (5・7・13)は口頸部がくの字状に外反し、口縁端部がやや内傾した端面をなす。5は外面を、7は内外面を、13は口縁部内面を除いてハケメ調整する。口径15.4・15.9・15.2cm、5の器高25.0cm。(6・10・11・15)は口頸部がくの字状に外反し、口縁端部を丸くおさめる。6・15はハケメ調整のみを、10・11はタタキメを施す。口径14.7・15.8・18.1・11.3cm、6・10・15の器高16.0・16.2・10.7cm。(8・9)は口頸部がくの字状に外反し、口縁端面がやや窪む。8は外面にタタキメを施した後肩部付近のみハケメ調整を加える。9は外面にタタキメを施し、肩部付近以下の内面はナデを行なう。口径14.8・11.3cm、器高13.0・11.9cm。(12)は口頸部がくの字状に外反し、口縁部がやや内窓して、上方に拡張する。外面はハケメ調整、内面はナデ仕上げを行なうが底部付近はハケメ調整痕が残る。(14)は所謂、受け口状口縁を呈する。外面はハケメ調整し、口縁部と頸部下に横方向の平行線文を施す。口径14.6cm。(30)は口頸部がくの字状に外反し、口縁端部が外傾する。外面はタタキメを施し、内面は頸部付近までハケメ調整し、頸部以下はナデを行なう。口径16.3cm。(35・36)は口縁部がかるく内窓気味に外反し、口縁端部をヨコナデにより引き出す。外面はハケメ調整し、内面は肩部付近以下をヘラケズリする。口径16.3・13.8cm。

鉢(16~22・31) (16)は口縁部が外反し、口縁端部を面取りする。外面はナデを行ない、内面は肩部以下をハケメ調整する。口径14.8cm、器高11.1cm。(17)はやや内窓気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁部の1箇所を外方に引き出し片口とする。内外面はナデを行なう。口径8.5cm、器高12.9cm。(18)は口縁部が屈曲して立ち上がる受け口状を呈する。外面の中程をハケメ調整する。口径9.6cm、器高9.0cm。(19)は直立する短い口縁部からなる。外面はタタキメの後、最大径付近をハケメ、それ以下をヘラケズリする。内面は肩部付近以下をヘラケズリする。口径10.7cm。(20)は内窓気味に直立する体部からなる。内外面をハケメ調整する。口径8.3cm、器高5.8cm。(21・22)はやや内窓気味に外開きする体部からなる。21はヘラミガキで仕上げ、22は外面をタタキメ、内面をハケメ調整する。口径13.6・13.4cm、器高7.1・6.3cm。(31)は口頸部がくの字状に外反し、丸底からなる。外面は底部付近をヘラケズリし、内面はヘラミガキする。口径11.0cm、器高6.9cm。

高杯(23~25) (23)は底部付近で屈曲して外上方に開く杯部である。器面が剥落しており、調整痕不明。口径15.8cm。(24・25)は脚部の中程で角度を変えて外方に開き、円孔を3箇所に配する。24・25とも外面はヘラミガキ、内面の据部付近をハケメ調整する。

器台(26) 円筒形の筒部と外方に開く口縁部と裾部からなり、筒部下に円孔を4箇所に

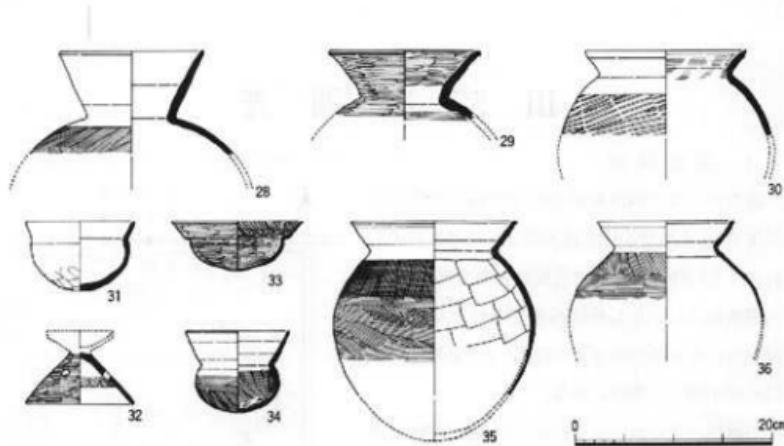


図6 2号・8号・11号・17号住居址出土土器

配する。外面及び内面の上部をハケメ調整する。口径17.4cm、根径16.2cm、器高12.5cm。

手焼り形土器(27) 最大径付近から底部に向かってそばまる体部である。最大径付近に1条の突帯を貼り付け、突帯上に刻目を施す。肩部付近にヘラ書きの乱れた斜格子文を、その下部に2条の波状文を飾る。外面は突帯から上部をナデ、下部をヘラミガキする。

小型器台(32) 直線的に開く脚部である。脚部中程に円孔を3箇所に配する。外面はヘラミガキし、内面はハケメを施した後ナデ仕上げする。

小型丸底壺(33・34) (33)は浅い体部と屈曲した口頸部及び外方に開く口縁部からなる。内外面は丁寧なヘラミガキを行なう。口径13.2cm、器高5.0cm。(34)は球形の体部と外上方に開く口縁部からなる。体部の内外面をハケメ調整する。口径10.4cm、器高8.3cm。

4 小結

検出した遺構の時期は出土した遺物などからみて、3～7・9・11～13・15・16・18・19号住居址及びSK1・2が3～4世紀、1・2・8・10・14・17号住居址が4～5世紀前半、SD1が6～7世紀である。

調査した19戸の竪穴住居址群は、栗栖野丘陵南端付近から南西にかけての低位段丘上に弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成された竪穴住居群(集落)を構成する一部である。4～5世紀前半(ほぼ布留式併行期)の竪穴住居址の実態は、中臣遺跡ではこれまで判然としているとは言い難い状態であった。今回、6戸ではあるが当該期の竪穴住居址を調査したことにより、その実態を明らかにする上でさきやかな見通しを得ることができた。

III 57 次 調査

1 調査経過

調査地点は山科区勤修寺西金ヶ崎42番地3に所在する。当該地が住宅建設地として埋め立てられるに伴い、事前に発掘調査を実施した。

調査地点は栗栖野丘陵西南先端付近から旧安祥寺川に至る低位段丘部に位置し、旧安祥寺川とは約80m離れた地点にある。

当該地周辺におけるこれまでの発掘調査は、市街化道路及び宅地などに対し、昭和50年度以降6次・10次・28次調査など(図版三)が実施されている。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址等、古墳時代後期以後の竪穴住居址・

掘立柱建物跡等を多数検出した。また、北接する10次調査地点で当調査区にまたがると考えられる掘立柱建物跡があるなど、周辺部の遺構のあり方からみても当該地にはなんらかの遺構が存在すると予測できた。なお、当該地と28次調査地点にはさまれた宅地を、昭和55年に試掘調査(80・B B・R T-10)しており、古墳時代後期の竪穴住居址床面・壁溝などを検出した。

調査対象地の面積は約270m²あり、ほぼ対象地全域を調査した。調査区の基本層序は耕土・床土が30~55cmある。調査区の北側約3分の2では床土下に暗黄灰色泥土層が40~60cmあり、それより下層は地山の淡緑灰色微砂が堆積する。南側3分の1では床土下が地山(黄灰色泥土)である。なお、暗黄灰色泥土層からは縄文土器(晚期)が少量出土した。

2 遺構・遺物

遺構は暗黄灰色泥土及び地山(黄灰色泥土)上面で検出し、1・2・3号住居址、SB1, SK1・2・3, SX1・2, ピットなどがある。遺物は各遺構及び暗黄灰色泥土層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・石築などが遺物整理箱で17箱出土した。

1号住居址 調査区の南西隅で検出した。2・3号住居址北西隅付近及びSK1の大部分を掘り下げて構築する。なお、当竪穴住居址の南東部は調査区外にあり、未検出である。平面形は調査部分の形状からみて方形を呈すると考えられ、北西角付近-北東角付近で4.

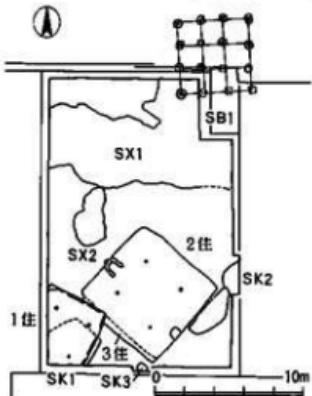


図7 調査区平面図

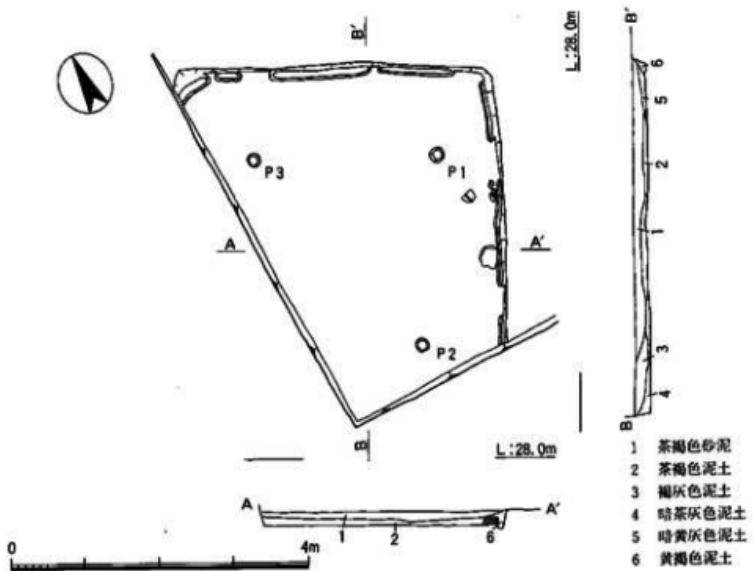


図8 1号住居址

30m、床面までの深さ20~24cmある。壁溝は検出部では、途切れ途切れながらも壁体下に巡る。上幅8~15cm、床面からの深さ2~6cmある。主柱穴は3箇所あるが、本来4主柱からなり、南西に位置する柱穴は調査区外にある。各柱穴は径16cmの柱当りを有し、床面からの深さ21~28cmある。柱間隔はP1-P2間で2.52m、P1-P3間で2.47mある。なお、カマドは調査区外にあるとみられ未検出である。遺物は床面などから土師器壺、須恵器平瓶、円筒埴輪の小片などが出土した。

2号住居址 1号住居址北東角付近と重複した位置で検出し、3号住居址建て替え後の整穴住居址である。3号住居址の南西壁から中央寄りに40cmほどの幅で埋め立てて縮少し、当住居址の南西壁とするが、北西壁は南西側で40cmほど外側へ拡張する。北東・南東壁は3号住居址のそれと共有した可能性が強いが、確証は得られなかった。P2は3号住居址の主柱と同位置で、P1は北西に柱当り1箇分ほどを、P3・P4は北東に20~25cmほど柱位置をそれぞれずらして建て替えを行う。カマドは3号住居址カマドの袖部を削平し、やや南東に位置をずらして再構築している。なお、床面は3号住居址床面と共有している。平面形は方形を呈し、検出面で長軸6.80m、短軸6.40m、床面までの深さ10~24cmある。

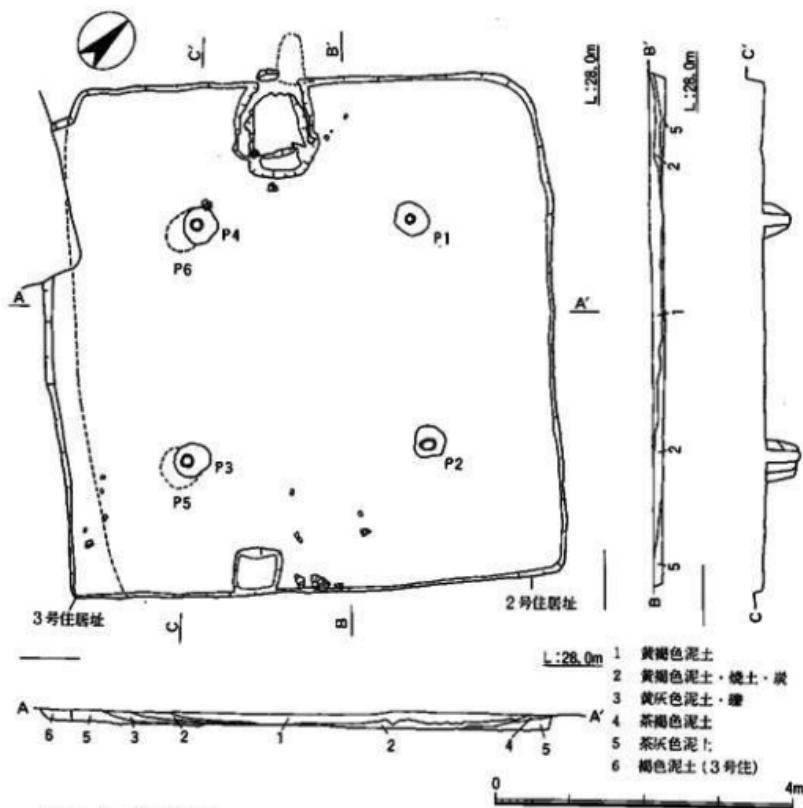
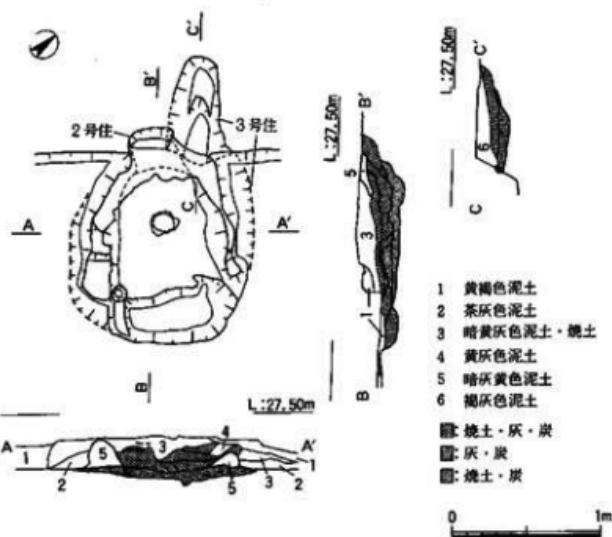


図9 2・3号住居址

壁溝は検出せず、本来有しなかったと考えられる。主柱穴は4箇所あり、各柱穴は径14~16cmの柱当りを有し、床面からの深さ36~43cmある。柱間隔はP1から右回りで3.02・3.24・3.13・2.86mある。北西壁の中央からやや南西に偏る位置にカマドを付設する。カマドは焚口部・燃焼部・煙道部・袖部を検出した。支脚は土師器甕を倒立した状態で転用し、燃焼部の中央に据え付けている。なお、袖部及び煙道部の上方は耕作等による削平を受けている。焚口部-煙道部間で126cm、燃焼部幅56cm、袖頂部から燃焼部底まで24cmある。南東壁中央から南西に偏った位置に貯蔵穴が1箇所ある。平面形は方形を呈し、長軸65cm、短軸61cm、床面からの深さ9cmある。なお、当竪穴住居廃絶後、床面中央部がまだ埋没して

いない段階で多量の土器を投棄し、何らかの可燃物(窓穴住居等の廃材?)を大量に燃やした痕跡が認められた。遺物は床面及びカマドなどから土師器壺・瓶・杯、須恵器杯などが出土した。なお、覆土から石錠2個が出土した。



3号住居址 住 図10 2・3号住居址カマド

居の施設が2号住居址により大部分削平ないしはつくり変えられており、南西壁付近とカマドの一部及び主柱穴を検出したのみである。壁溝は南西壁下では検出せず、本来有しなかったと考えられる。主柱穴は4箇所あり、2号住居址の柱穴とほぼ同じ位の深さを有する。柱間隔はP 1・2・5・6間(掘形の心々)の右回りで2.86・3.35・3.10・3.14mある。カマドの上部は建て替え時に削平されており、焚口・燃焼部の一部を2号住居址カマド下で、煙道部の一部を2号住居址北西壁と接した外側で検出した。焚口一煙道部間で190cm(復元長)、燃焼部幅124cm(復元長)、床面から燃焼部底まで9cmある。遺物はカマドなどから土師器壺などが少量出土した。

S B 1 調査区の北東隅、S X 1の上面で検出した3間×3間の総柱建物である。10次調査(: S B O 4)で建物の大部分は調査済であるが、今回の調査は南西端に位置する柱穴1箇所について行なった。これまでの調査結果を総合すると、柱掘形はほぼ方形を呈し一辺40~52cm、深さ37~54cmある。桁行、梁行とも4.8m(1.7-1.4-1.7m)ある。

S K 1 1号住居址と重複した位置で検出した土壤で、上部の大半は1号住居址により削平されている。土壤の南西部は調査区外にあり、未調査である。平面形は方形を呈するのみられ、北西-南東間で3.35m、検出面から土壤底まで25~35cmある。土壤底面には、1.

8×2.8mほどの範囲で、加熱を受けて赤変した箇所がある。なお、埋土には少量の焼土を含有するのみである。遺物は土師器壺・甌・杯などが出土した。

S K 2 2号住居址の東側で検出した土壤で、東半は調査区外にあり未調査である。平面形は丸味を帯びた方形を呈するとみられる。規模は不明であるが、検出面からの深さ4～10cmあり、埋土に多量の炭を含有する。遺物は土師器壺などの小片が少量出土した。

S K 3 調査区の南端、中央付近で検出した土壤である。平面形は方形を呈し、長軸65cm、短軸50cm、検出面から壌底まで10cmある。遺物は壌底から5～10cmほど浮いた状態で出土し、壺・甌・高杯などがある。

S X 1 調査区の北部で検出した流路状を呈する窪みである。調査区内では北から西へ屈曲した形状を呈し、南北で幅3.2～4.5m、深さ5～8cmある。底の水準は北端と西端はほぼ同じであるが、東端は8cmほど低い。堆積土は暗茶褐色泥土である。遺物は壺などの小片が出土した。

S X 2 S X 1 の南側に接した位置で検出した土壤状を呈する窪みである。平面形は不整形な橢円形を呈し、長径3.90m、短径2.12m、検出面から底まで13～20cmある。窪みがある程度埋まった段階(2～5cm)で土器を多量に投棄している。遺物は壺・甌・鉢・高杯などが出土地。

3 小結

検出した遺構の時期は出土した遺物などからみて、SK 3・SX 1・2が3～4世紀、1～3号住居址・SK 1・2が6～7世紀、SB 1が7世紀中頃以後である。

調査区の北半に堆積する暗黄灰色泥土層から、突蒂文を有する縄文土器などの細片が少量ではあるが出土した。この黄灰色泥土層は地山の窪みに形成された湿地に堆積する層であり(調査時においても自然湧水があった)、この層が縄文時代晩期の生活面であるとは考え難いが、いずれにせよ、旧安祥寺川と栗栖野丘陵にはさまれた低位段丘部では、初めて縄文時代の遺物包含層として認められる層を検出したことになる。

1・2・3号住居址は、古墳時代後期(6～7世紀)に形成され、周辺一帯に展開する堅穴住居・掘立柱建物群(集落)を構成する一部である。

SB 1は真南北に対して北で3.5°西に振り、真南北に対して方位性を有する建物である。当該地から北へ70mに位置する地点(41次・53次調査)でも同時期と考えられる同様な方位性を有する掘立柱建物を検出している。7世紀中頃以後の建物(集落)の性格の一端がうかがえる資料であるといえよう。

IV ま と め

本年度、発掘調査を実施した箇所は55次、56次、57次調査の3箇所である。調査成果をまとめると、主な遺構には弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址14戸、古墳時代前期の竪穴住居址6戸、古墳時代後期の竪穴住居址3戸・溝2条、飛鳥時代以後の掘立柱建物1棟、江戸時代後期の河川1条（旧安祥寺川の旧河道）などがある。その他に遺構ではないが、縄文時代晩期の遺物包含層を57次調査で検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器、鉄製品などが遺物整理箱で74箱出土した。

弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期～飛鳥時代の集落は、これまでの調査で低位段丘部と栗栖野丘陵の西南側に形成されたことが判明している。すなわち、旧安祥寺川に面した低位段丘には2グループが、山科川に面した低位段丘にも2グループが、丘陵西南側には1グループが想定できる¹⁾。55次調査で検出した竪穴住居址は西南側グループを、56次、57次調査で検出した竪穴住居址は時期の異なる南側グループを構成する。

55次調査で検出した溝（S D I）は幅、延長の長さとも、中臣遺跡でこれまで検出した溝では最大の規模（上幅約2～5m、検出長約220m、高低差約1.8m）を有し、北西から南東方向に傾斜する流路である。この溝は古墳時代後期～飛鳥時代の西南側グループの中を貫流し、この溝の東・西では竪穴住居址・掘立柱建物跡などを検出している。この溝が単に用・排水路的役割だけを果していたのか、あるいはグループ内を東西に面する性格をも合せ持っていたのか等、溝の性格についてさまざまな想定も可能であるが、将来の調査結果を待って解決しなければならない課題の一つである。

56次調査では4～5世紀前半（ほぼ布留式併行期）の竪穴住居址を6戸検出した。南側グループでは6次調査分と併せ7戸を検出したことになる²⁾。なお、当該期の竪穴住居址を西南側グループで1戸、東南側グループで1戸（+1戸？）検出している。東側グループについては未検出の状態である³⁾。東側グループを除いた他のグループは少なくともこの時期まで集落が継続して営まれていたことがわかる。この時期の集落が前代（第V様式～庄内式併行期）までと同様に竪穴住居のみによって集落が構成されるのか、あるいは竪穴住居と掘立柱建物とから構成されるのかという集落の構造（集団構成のあり方）にかかる重要な問題もまた将来に持ち越された課題の一つである。

57次調査で検出した縄文時代晩期の遺物包含層は湿地を形成する堆積層であり、また出土遺物のあり方などからみて、単に生活面とは考えられず、付近一帯の調査例の増加を待

ってその性格、広がり等を追求しなければならない。

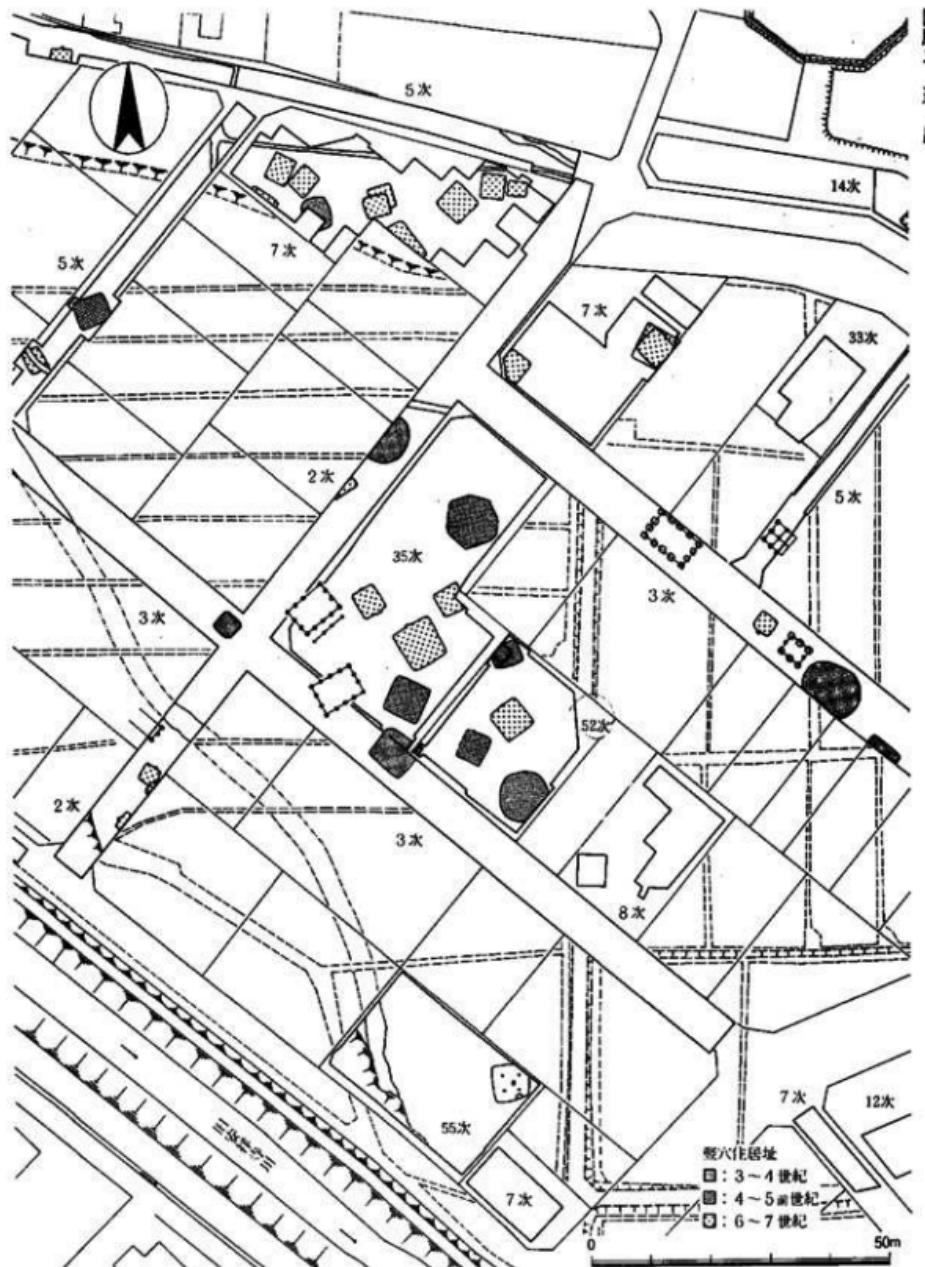
57次と10次調査区にまたがって検出した掘立柱建物は真南北に対して北で3.5°西に振る。これまでの調査で、7世紀中頃以降の掘立柱建物は真南北に対して方位性を有すると考えられるが、それ以前の掘立柱建物は竪穴住居と同じく方向はまちまちであり、その変化は大きい。

- 註 1) 各グループは昨年度報告した5グループに対応する。すなわち、52次調査区周辺を西南側グループ、53次調査区周辺を南側グループ、23次調査区周辺を東側グループ、49次調査区周辺を東南側グループ、43次調査区周辺を斜面西南側グループと暫定的に呼称する。ただし将来、調査例の増加に伴い集落の実態がより明らかになった時点でグループを細分化、あるいはグループ自体をも改変する場合があり得る。なお、このグルーピングは当該期の集落についてのみを対象とし、当該期以外では集落を構成する遺構の検出例が皆無かもしくは極端に少なく現段階ではその対象とはなり得ない状態であり、考慮に入れていない。「中臣遺跡発掘調査概報 昭和57年度」京都市埋蔵文化財研究所 昭和58年
- 2) 6次調査については、註 1)の図版3・図版5と今年度の図4・図版三とでは若干異なっている箇所がある。これは今回の調査結果と6次調査の調査日誌・図面・遺物等をつき合せて、点検・検討を行なった結果生じた混乱であり訂正する。
- 3) 第V様式～庄内式併行期の竪穴住居址は、今までのところ西南側グループで13戸、南側グループで40戸、東側グループで1戸、南東側グループで5戸検出している。

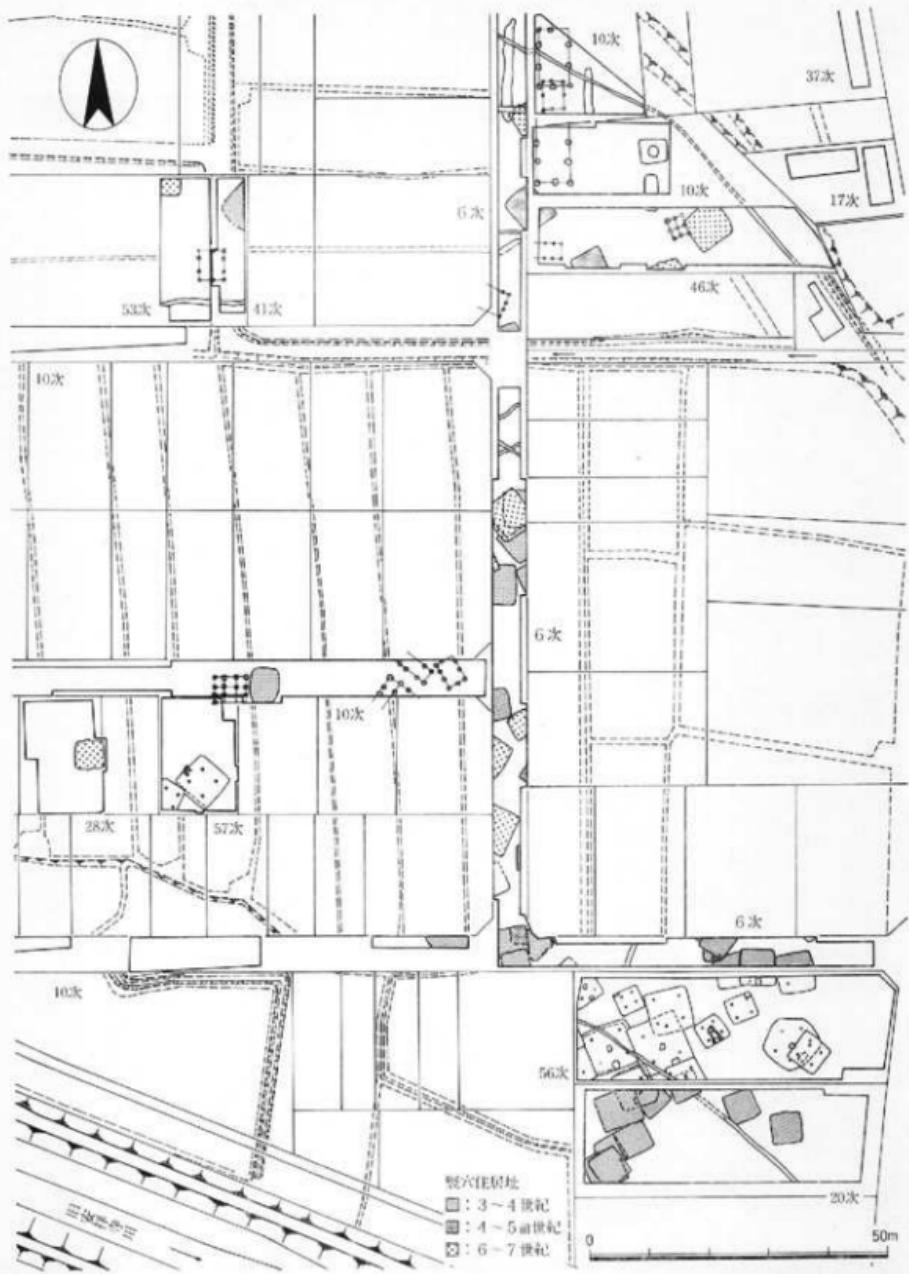
図 版



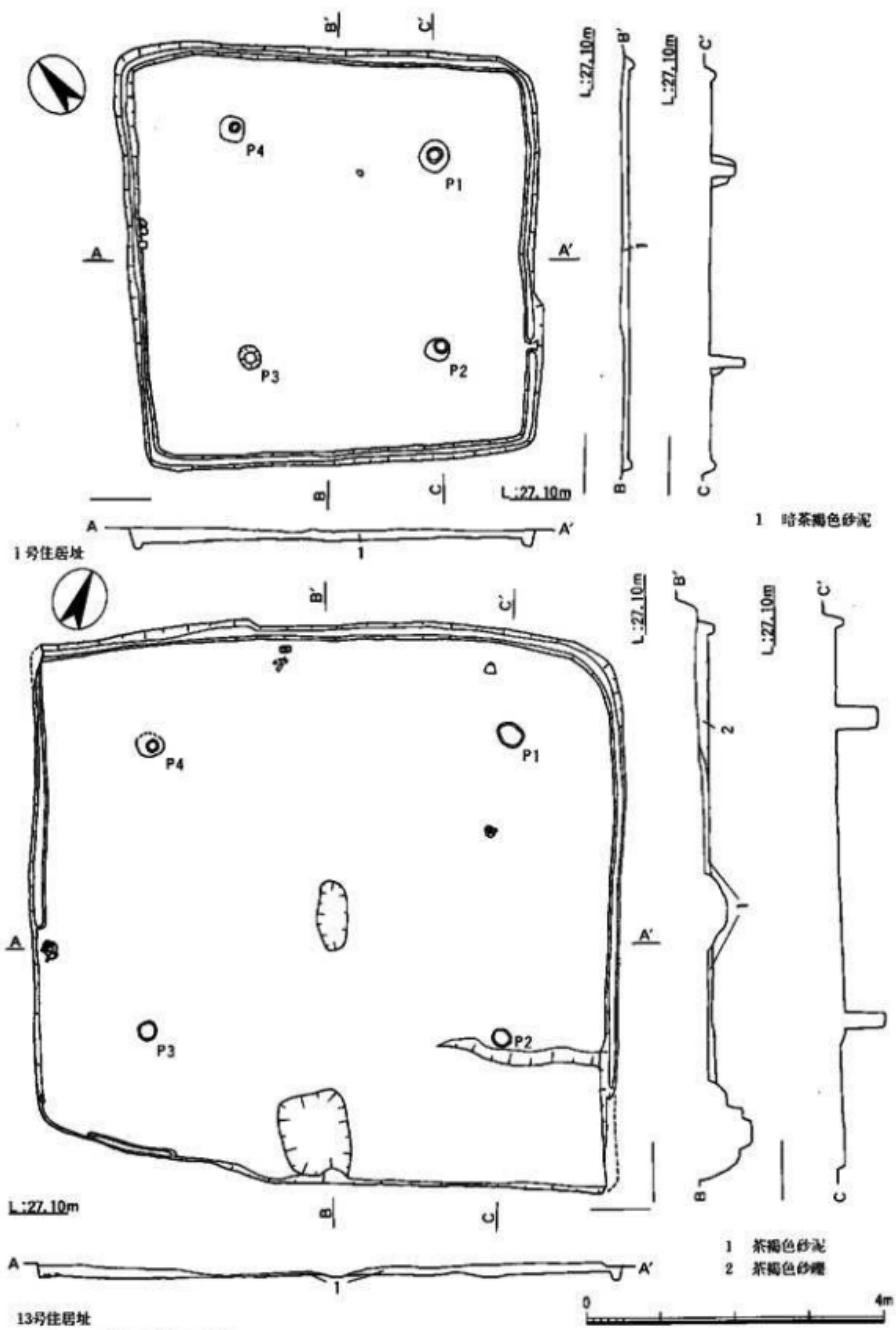
調査位置図



55次調査区周辺主要遺構位置図

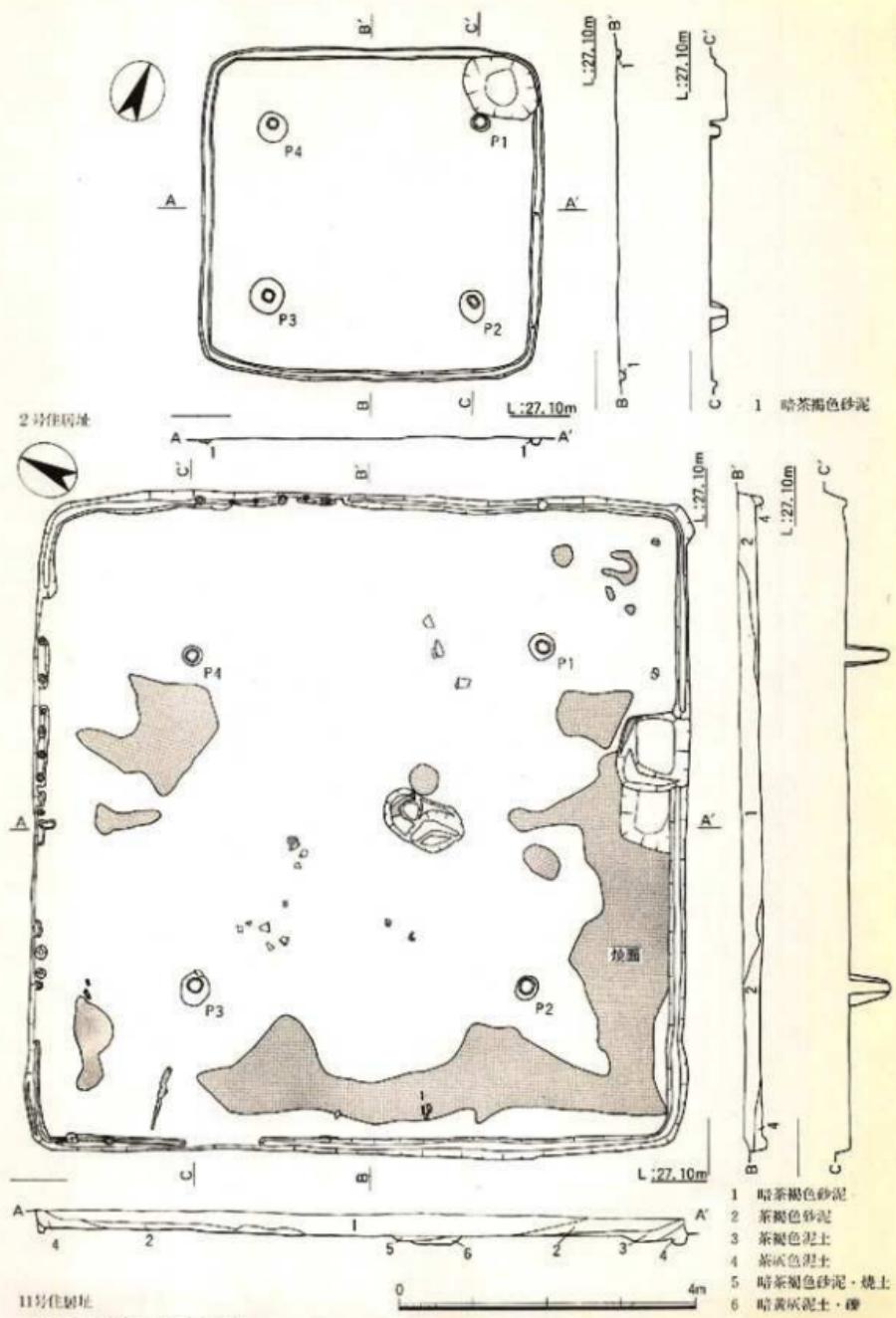


56・57次調査区周辺主要造構位置図



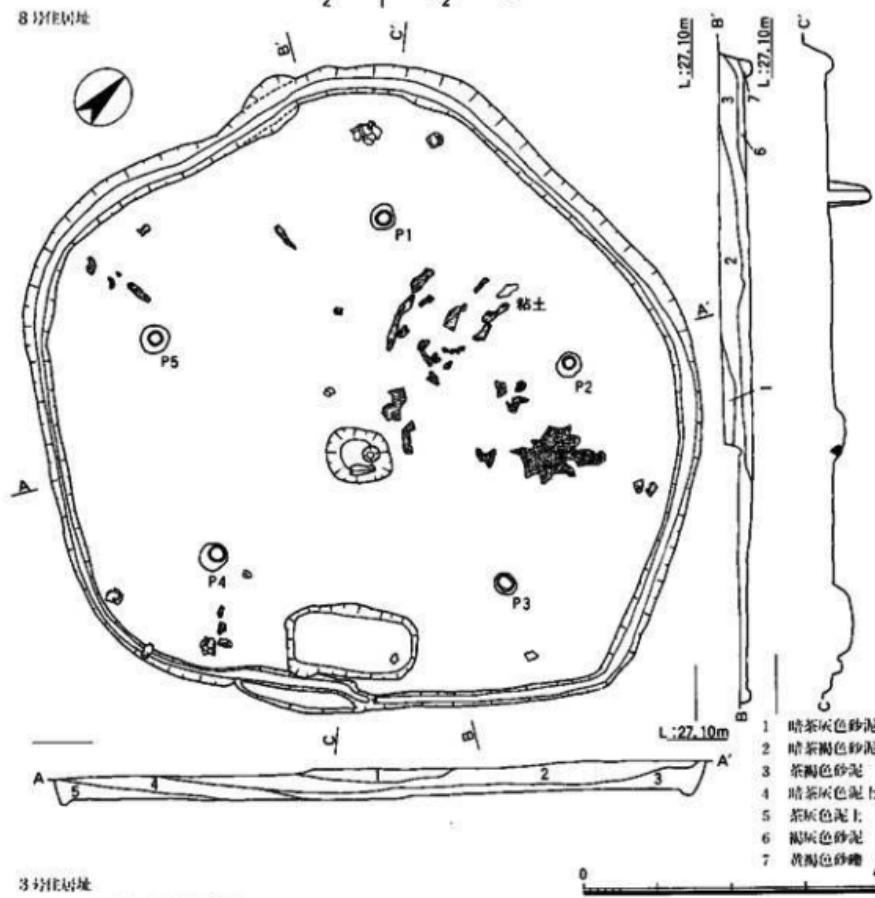
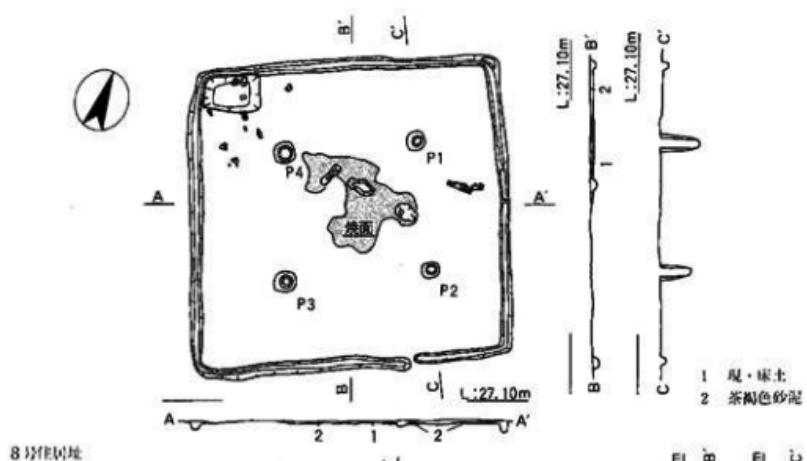
1号住居址

56次 竖穴住居址実測図

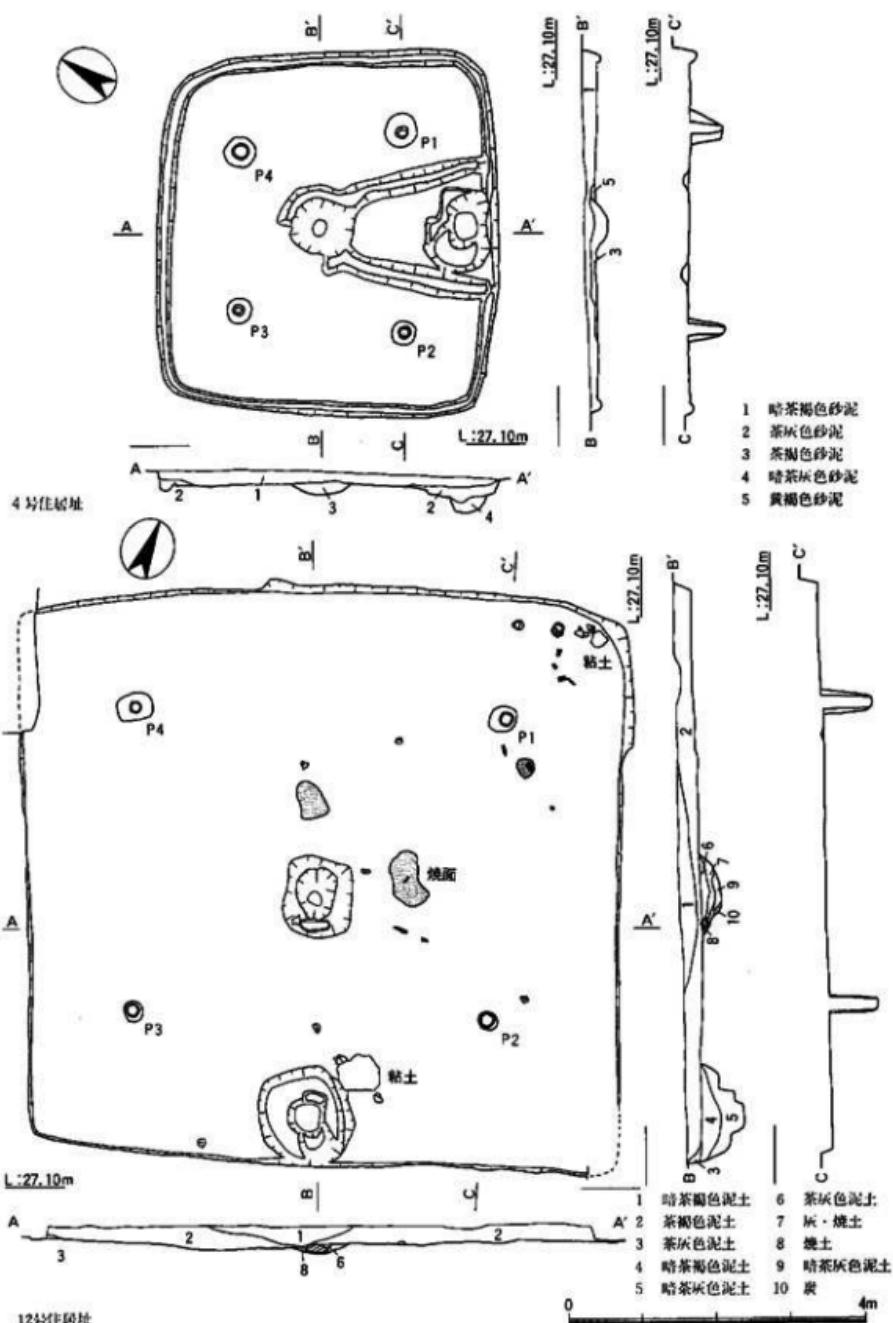


11号住居址

56次 竖穴住居址実測図

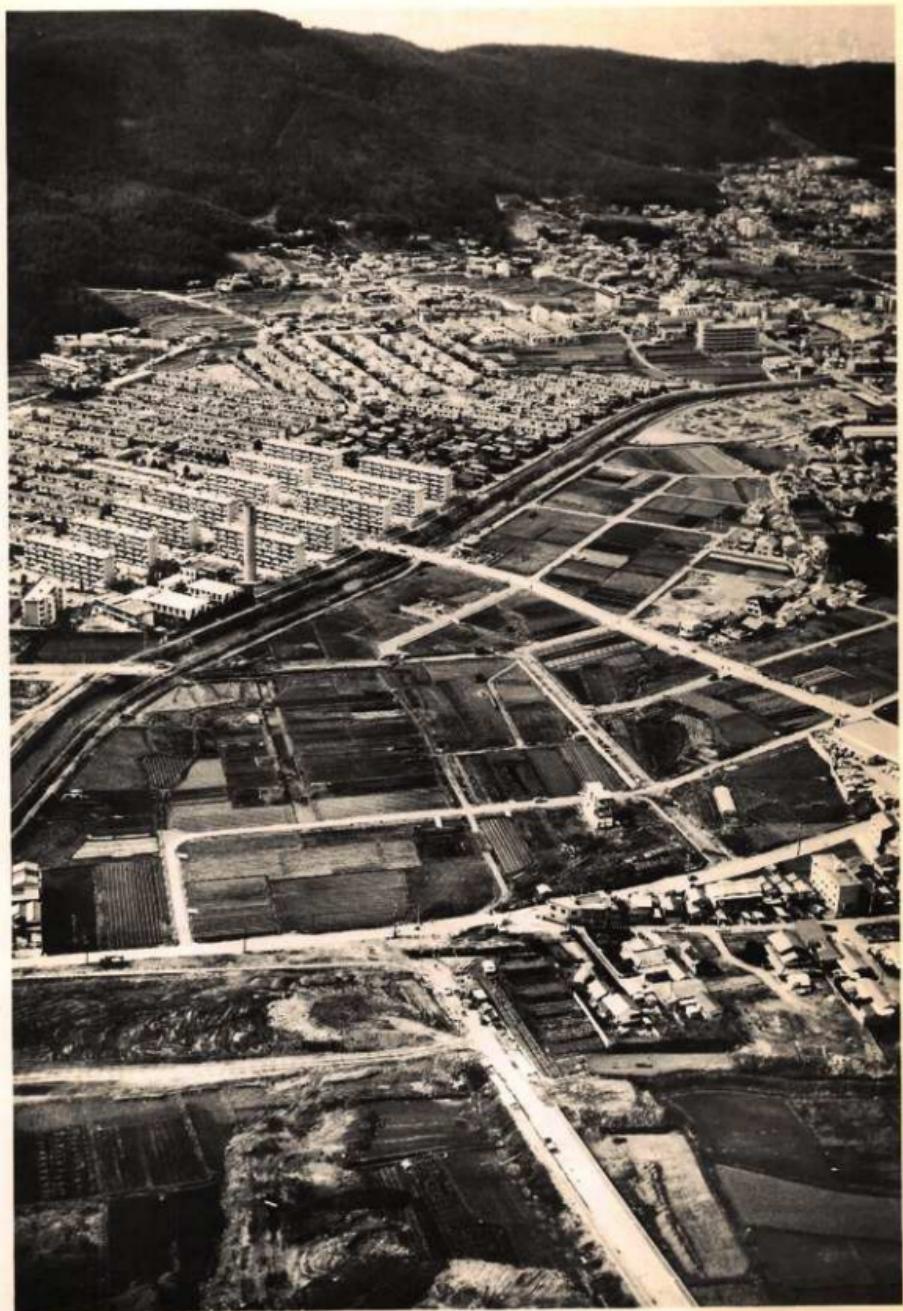


56次 穹穴住居址実測図



12号住居址

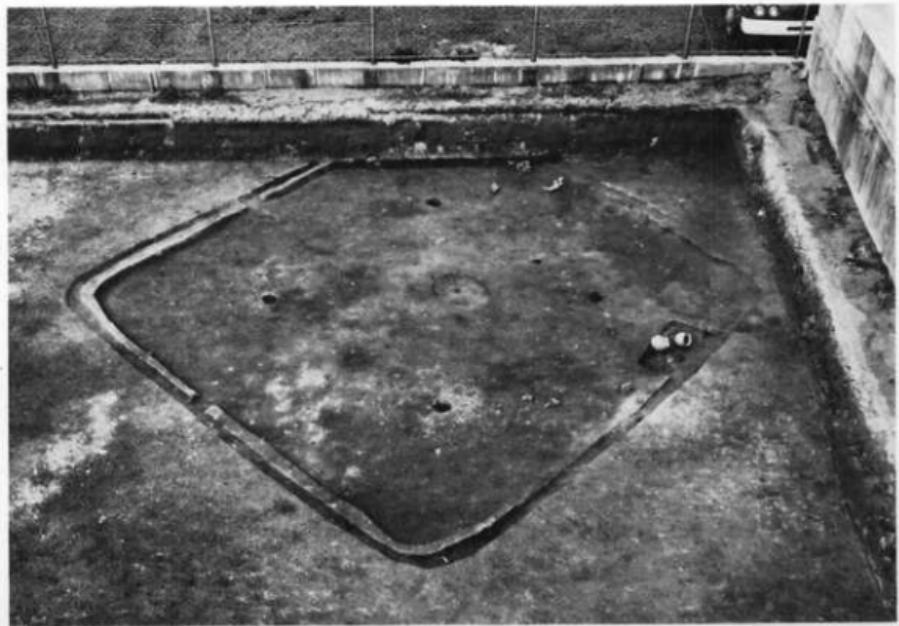
56次 竖穴住居址実測図



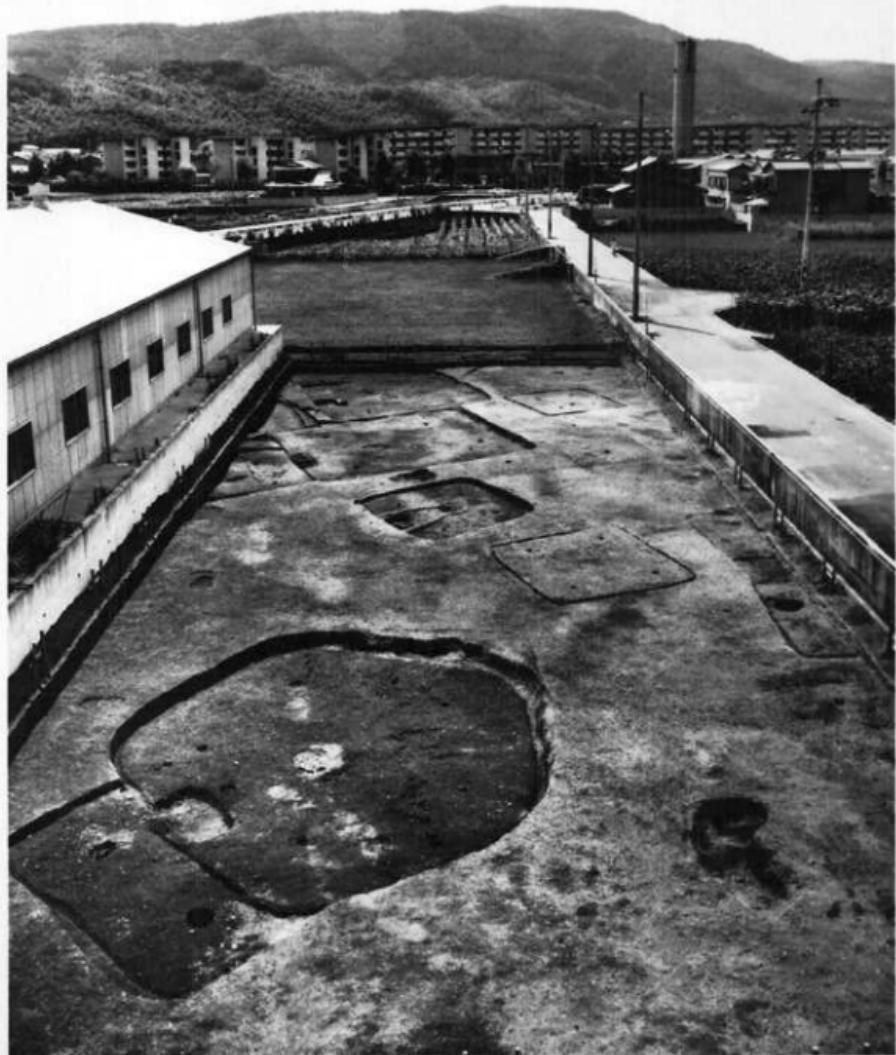
航空写真（昭和52年撮影）



1 55次全景（南から）



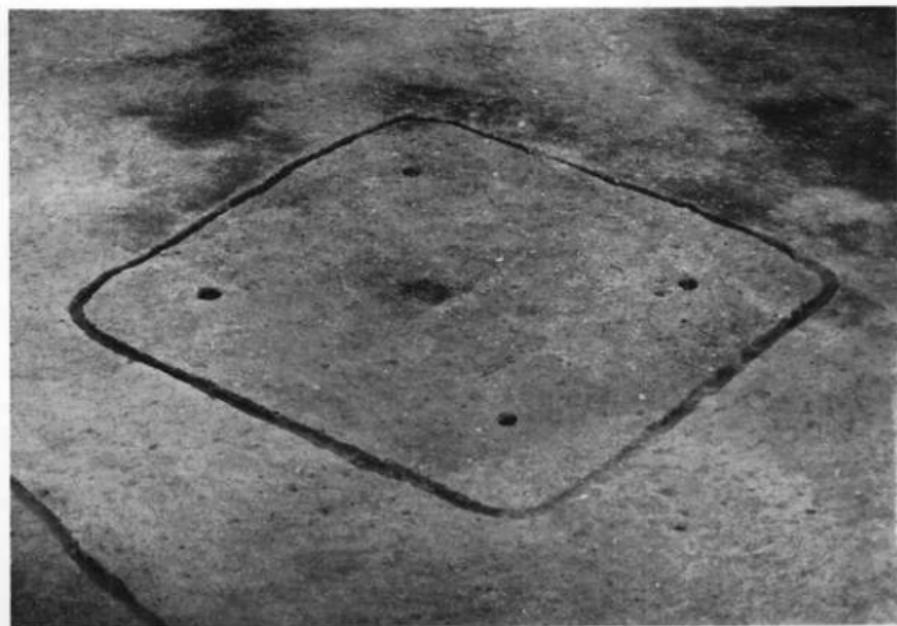
2 1号住居址全景（南西から）



56次全景（東から）



1 1号住居址全景（北西から）



2 2号住居址全景（北西から）



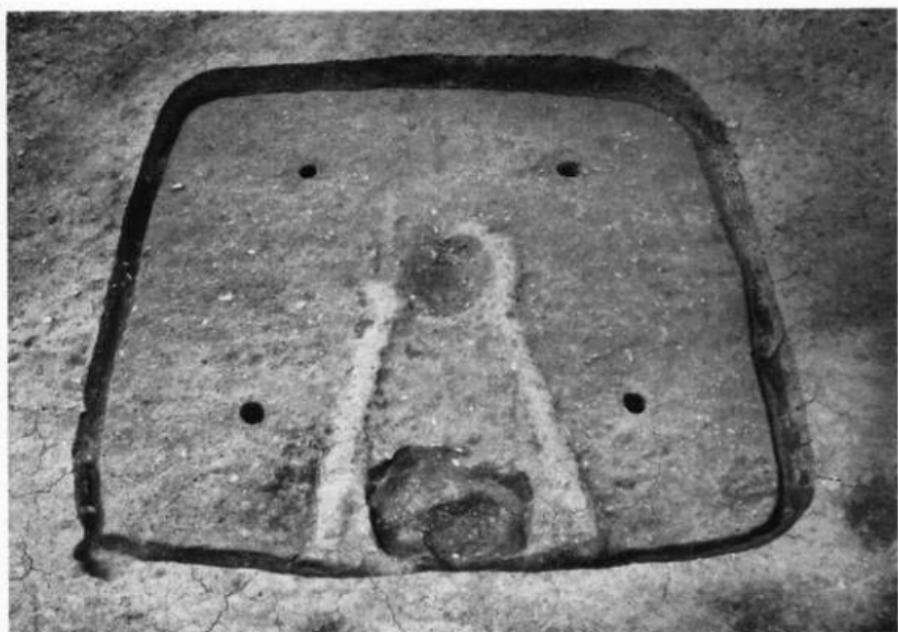
1 3号住居址全景（北東から）



2 同遺物出土状況



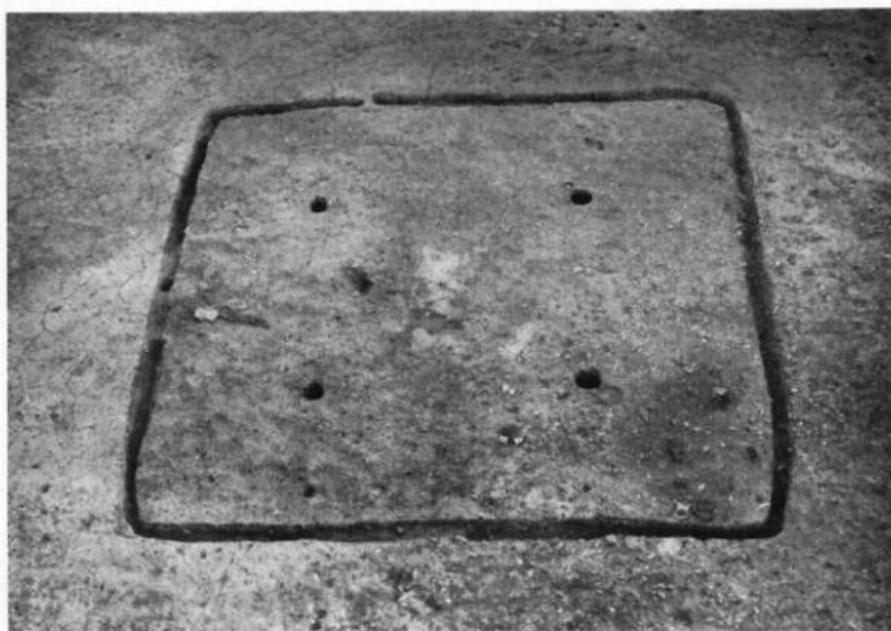
3 同



1 4号住居址全貌（南東から）



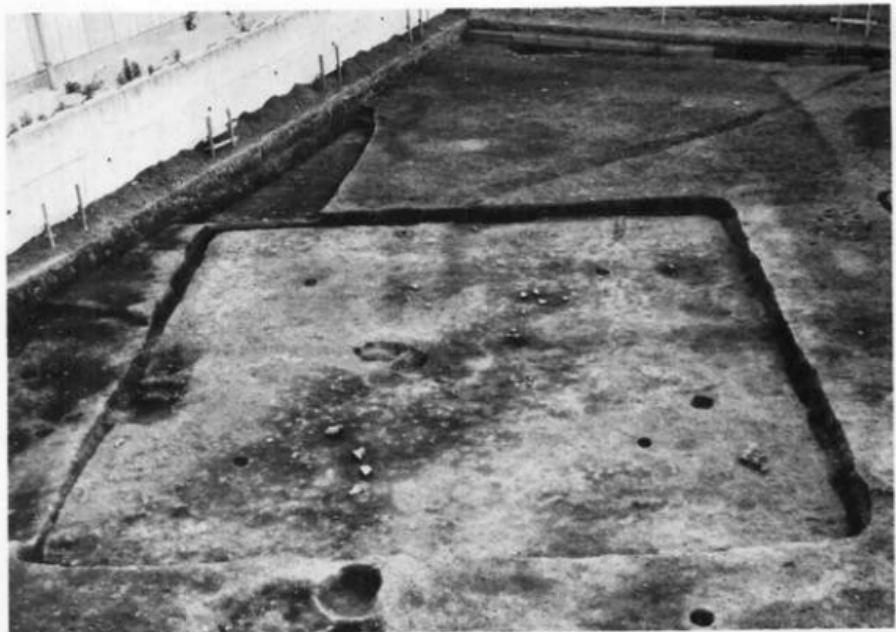
2 同土堤状高まり



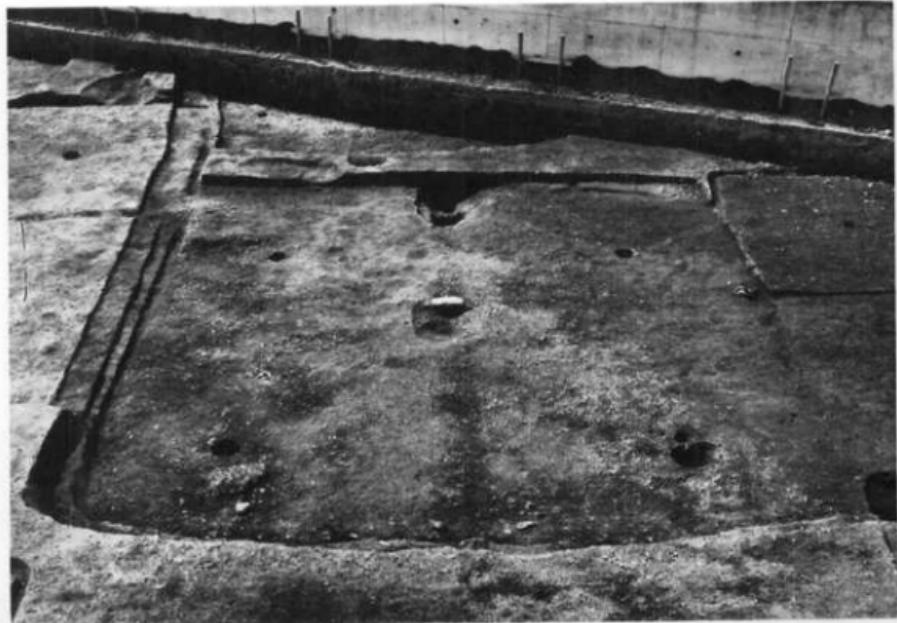
1 8号住居址全景（北西から）



2 9号住居址全景（東から）



1 11号住居址全景（北東から）



2 13号住居址全景（北西から）



1 12号住居址全景（北東から）



2 同時藏穴、粘土塊出土状況



3 同遺物出土状況



1 15号住居址全景（北東から）



2 同遺物出土状況（手前）



3 同細部状況



57次全景（北から）



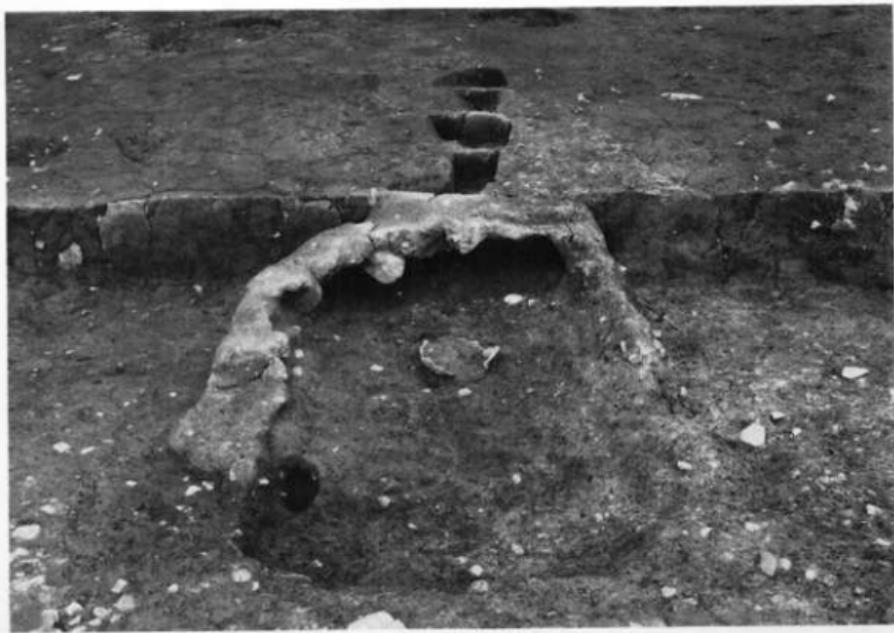
1 1号住居址全景（北東から）



2 同遺物出土状況



1 2号住居址全景（北東から）



2 同カマド（南東から）



1

2



3



8



12



9



5



6



17



16



26



21



22



28



55-1



31



35



33



34



36

55次調查(55-1)・56次調查出土土器

中臣遺跡発掘調査概報

昭和58年度

発行日 昭和59年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財團法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真陽社